2階の左手は「アジア関係図書閲覧室」である。英語書が大部分。それもインド，ビルマ，セイロンなどが中心となっていて，たとえば中国関係などは，1段ぐらいしか見当らない。この辺の充実を望みたいところである。

3階の「タイ国関係図書閲覧室」こそは，この図書館のいわば本命であろう。タイ語だけでなく，タイ国関係の外国語図書がすべてこの部屋にあつめられている。ただし貴重書に属するもの（たとえば1873年版のブラドレー博士著タイ・タイ辞典）などはこの部屋の開架式書棚にはなく，4階の貴重書書庫（ここへ入るには特別の許可がいる）にしまってあるので，カードによって検索の上，係員に申し出なければならない。書棚を一見すると，あまりにがらがらなので一瞬失望しかけたが，カードをくってみて安心した。さすがによく揃っていて，町では手に入らない Nangsu Chaek なども，ほとんどあるようである。なおこの部屋におさめられている Nangsu Chaek のうち，国立図書館が版権を所有しているものについては，印刷後一定の部数の納入を定められており，これを3階の「販売部」で安く入手できることを知っていると，何かと便利である。

3階の右手は「参考資料室」。各種の写本が要領よく展示されていて勉強になる。

4階へ上るには館長の特別の許可が必要である。ここは2つに仕切られ，左手には各種の貴重書が，右手のエアコン設備のある部屋には，Manuscript and Inscription Section の管理の下にある各種写本（Bai Lan および Samut Khoi）が分類整理されている。

5階は倉庫で，蔵書の余部が入れてあるという。

各部屋を廻ってみての印象では，とにかく移転をようやく終えたばかりで，整理に目下全力をあげている最中という感じであった。しかし，いずれにせよこれだけの施設が完成を見たということだけでも，タイ国立図書館史上，画期的なことと言わねばなるまい。タイ研究の今後の発展のため大いに慶賀すべきことである。なおこの図書館は祝日のほかは一切休日なし，毎日8時30分から16時30分まで利用できることを附記しておく。

メサリアンの谷より

飯　島　　茂

タイ国における乾季の終りを告げる恒例のソンクラーンの祭りがやってくる。なかでもとりわけタイ国北部では毎年4月中旬になると，人びとは気狂いのようになってこの水祭りを祝う。この地方の3～4月におけるぱさぱさに乾ききったひどい暑さを経験しないと，水祭りの本当の楽しさは解らないだろうし，この祭りに示すタイ人の爆発的なエネルギーの根源がよく理解できないであろう。

ソンクラーンの祭りは元来春分の日を祝うタイ国の旧正月で，ビルマの水祭りとは同系統のものといわれる。この日は仏像，僧侶，両親，長老などに敬意と祝福のしるしとして，水をかけるしきたりがある。国王も宮中でみそぎを受けられ，町角では人びとがおたがいに水をかけあう習慣が古くからおこなわれている。しかし，バンコクではその慣行が過熱しすぎて首府としての機能がおちたり，外国人に迷惑だというので，現在は禁止されている。

だが，水祭りは北部各地方では今日でもたいへん盛んに祝われる。とりわけ古都チェンマイのソンクラーンは有名である。そこでは洋裁用の小型の霧吹きや手製の水鉄砲による可愛い放水から，果てはトラックに

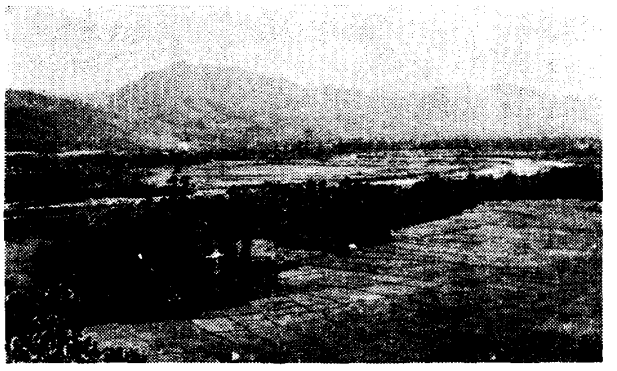

写真 1　メサリアンの谷，手前の林はティカニ村

ドラムカンを満載して，道を行く人びとにかけて歩く荒っぽいソンクラーンまで，チェンマイの人はいつにない情熱を傾ける。なかには水の中に氷をいれて，着飾ったチェンマイ美人がふるえあがり，悲鳴をあげるのを見て喜ぶいささか悪趣味のものまである。ここまでくると，ソンクラーンの水のかけあいは本来の意義を失い，“報復”が“報復”をうむいたずら的様相を示してくる。しかし，いつもはたいへんに行儀の良い北タイ人の社会では時にはこのような思いきった開放感を味わうことも必要なのではないかと思う。ミス・ソンクラーンの選出をピークとする水祭りはチェンマイでは3日間派手に続き，タイ国各地から多数の観光客を集めるのである。

ところで，多分にショー化したチェンマイにおけるソンクラーンの祭にくらべて，田舎の水祭りは寺院の中でも町角でも素朴ながらなかなか熱狂的に祝われる。チェンマイでは都市としての秩序を維持するために市当局が水祭りをある程度コントロールしている。たとえば，その期間を4月13日から15日の3日間に限定するとか，日没後の水のかけあいは禁止するとか，他人に危険を与えないためにビニールの水袋を投げつけることを禁止するなど，人びとがほどほどにソンクラーンを楽しめるようになっている。

しかし，チェンマイの町から一歩出ると，そこにはコントロールされない本来のソンクラーンが残っている。そこでは天下晴れての無礼講が延々と続く。4月10日を過ぎると，田舎の子供たちはもうじっとしていられない。バケツに水をいれたり，ビニールの袋に水をいっぱいつめて，道路のわきで車がやって来るのを待ち伏せる。なかでも一番鴨になるのはトラックをちょっと改良した無防備なバスである。容赦なく両側からぶっかけられる水にずぶぬれになりながらも，バスの乗客はただ苦笑するのみである。もっとも，なかにはバスの車掌などが水を用意していて時たま反撃することもある。

わたくしが住んでいるタイ国西北部のメサリアン地方ではそれがなんと4月の19日ぐらいまで延々と続く。しかも，水祭はチェンマイとはことなり，早朝から夜半まで続き，熱狂した青年たちはよその家の2階にまで水をまいて歩くのにはいささか閉口する。その上，人にあびせる水の水質には保証はない。どんな泥水でもよいのである。

メサリアンの北タイ人に輪をかけたのが平地に住む仏教化したカレン族のソンクラーンである。カレン族は元来精霊信仰をしている。仏教の影響のないカレン文化はタイ人やビルマ人の文化とはたいへんにことなっている。現在でもメサリアンの町からわずか20キロメートルほどしか離れていない山地に住むカレン族の間では，ソンクラーンの祭りはまったくおこなわれていない。しかし，山地から平地に移り住んで，北タイ人やシャン族と接触することにより，仏教的文化の影響を多少でも受けたカレン族は平地民と同様に盛大な水祭りをおこなう。いやそれどころか，いつも娯楽の少ないカレン族はこの時とばかり，派手に，景気良くこの祭を祝う。そのアナキーぶりはわが国の“非キリスト教的”クリスマスを思わせる異常さがある。

ただ，平地カレン族でも大部分はまだ完全にタイ化はしていないので，北タイの慣行とは多少ずれがある。タイ的なスタンダードから見ると宗教行事に頼りないところがある。たとえば水祭りの3日前に調査村に行って，いつから祭りが始まるかと村人に聞くと，ほとんどの者が正確な日どりを知らなかった。5人のカレンにそれを尋ねると，6通りぐらいの返事が返ってくるのには面くらった。当時遠路はるばるメサリアンを訪問してくださった大阪市立大学法学部神谷不二教授もわたくしとカレン族とのやりとりを目撃されて，たいへん驚かれておられたようである。

しかしながら，とにかく調査村のティカニにソンクラーンの祭が近づいてくる。4月12，13日頃になると，村人は村はずれのタート（仏塔）の所でおこなうソンクラーンの儀礼のために，飾りやのぼりなどを作って準備を始める。北タイ人のソンクラーンに遅れること3日，4月16日にようやくカレン村にもソンクラーン祭りがやってくる。もっとも子供たちは“本当の”ソンクラーンが待ち切れずに，数日前から人に水をかけ始めてはいた。当日の午後，村人はいっせいに村を出発して1キロメートルほど離れた裏山のタートの所に集る。老いも若きもタートの前に到着するとまずひざまずき，タイ風に三拝する。さらに，スエ・ドックという玉串のような木の葉をタートに捧げる。やがて太鼓やかねを持った若い男の一団がやってくると，かれらを先頭に村人はタートの周囲を仏教賛歌を歌いながら何回も何回もまわる。

この村にはワットがないので，南隣りにある北タイ人の村トングレムから僧侶（トウチャオ）と導師（アチーン）が招かれる。太陽がすでにビルマ国境の山に傾いた頃，かれらはタートの

所に到着する。儀礼はまったく仏教式に静かな読経に終始する。例によるカレン式精霊信仰のように，豚や鶏をいけにえにする派手な血なまぐささはさらにない。儀礼が終ると，カレンから僧侶に金と食物が寄進され，それを使い走りの少年が受け取り，一同山をおりる。

写真 2　タートのまわりを合唱しながらまわるカレンの少女たち

このようにタートにおけるソンクラーンの儀礼が終ると，カレンの村における水祭りが本格化してくる。水かけの無礼講である。誰れかまわず水をかけて歩く。このような時には逃げても無駄である。足の早いカレンはどこまでも追いかけてくる。ノートやカメラを持っているわたくしなどはかれらのまたとない攻撃目標である。わたくしはすべてをあきらめて，調査道具を全部ビニールの袋にいれて歩く。しかし，体は水をかけられるので1日中ぐっしょりである。気温は高くても湿度がきわめて低いので，屋内や日蔭でおこなう調査では鳥肌になり，寒さが身にこたえる。やがてカレン族もわたくしの立場を良く理解してくれて，ノートを開いている間は水をかけないという暗黙の紳士協定が成立したのは幸いであった。

水祭りが数日間も続くうちに，村人のかなりの者が鼻声になったことに気付く。水をかけたりかけられたりしながら，かざ声を出しているカレンを見ていると，気の毒というよりはむしろユーモラスでさえある。だが，そう思っていられたのは最初のうちだけであった。わたくしは自分の薬箱のかぜ薬やせき止め薬があっという間になくなり，いささかあわをくう。ソンクラーンの最後の1日は大人はほとんどへとへとになり，家にたいていこもってしまう。しかし，元気の良い青年男女や子供たちは疲れを知らずに最後の日まで水をかけあう。まったくかれらの馬力には驚くほかはない。娯楽のほとんどないこの村ではお祭りが数少ない楽しみのひとつなのであろう。かくして，ソンクラーンの祭りは無事終り，カレン族は雨季の到来を待つ。

5月3日，ビルマ国境の山波にいつもとは少しちがった黒い入道雲がむくむくと湧きあがった。やがてそれは雷鳴とともに大空をおおい，ものすごい豪雨となる。過去2カ月あまり大陸性盆地気候の殺人的暑さに悩まされていたわたくしたちにとってはこの雨のなんと心地よく快的であったことか。ぱさぱさに乾き切った大地は吸取紙のように雨を吸収する。土ぼこりをかぶってすべてが褐色になっていた自然に緑がよみがえり，万物は蘇生する。窓から外を眺めていると，ふと芥川竜之介の“雨蛙おまえもペンキのぬりたてか”という句を思い出し，久しぶりに日本の風物をなつかしく思う。

この地方のひどい暑さと乾燥に苦しんだことのある者ならばだれでもがもの皆よみがえる雨季入りの景色ほどすばらしいものはないと思うだろう。それになによりも気温がさがるのが良い。雨が降り出すとぐんぐんと涼しくなる。1時間もすると鳥肌がひどくなる。あまりうすら寒いのでふと壁にかけてある寒暖計を見る。まだそれでも30度Cを指している。しかし，わたくしたちは快的である。前の家のミャオ犬のミー君（熊という意味）さえも生きかえって，泥水の中ではしゃぎまわっている。

だがこのように雨を楽しんでいたのはほんの束の間であった。ベンガル湾からビルマの山々を越えて吹き寄せるモンスーンの雨が数日も続くと，さすがに乾ききった大地も水を受けつけなくなる。道のくぼみには大きい水たまりができて，水牛やあひるに格好な水あび場ができる。やがて道路と水田の区別がつきにくくなる。こうなるともういけない。乾季にはおおいに機動性を発揮した農村調査には不可欠のわがホンダのオートバイももうどうしようもなくなる。泥んこになった田舎道の中をゆうゆうとかっ歩している水牛を横目でにらみながら，スリップをしてただあえぐばかりである。やはりオートバイと水牛とではここの自然に対するエコロジカル・アダプテーションの歴史の層の厚さがちがう。

雨季がこのように本格化する頃にわたくしの調査期間は後わずかに1カ月余りになる。1964年から65年に

写真 3　カレン族の水祭り，年1度の無礼講だ，思い切り水をかけあおう

かけておこなった山地カレン族の補遺調査が残っているためにわたくしは間もなくメサリアンの谷から去らなければならない時が来る。そのために平地カレン族の調査の追い込みにはいる。

その頃のある日のことである。家の近くに住んでいる中年の巡査がやってくる。かれはいつもお茶を飲みに来たり，時には胸にかける仏像のお守りなどを持ってきてわたくしの仕事の成功を祈ってくれる。この好意的な巡査の陽気なところや思いやりがわたしは好きである。例によってかれは小1時間ほど家で遊んでゆく。席を立ちながら，地声の大声を少し落して20年前のことを話し出す。それはこの地方を通過した日本軍のことである。かれの話によると，日本軍がビルマの英軍を攻撃した際にもこの地方を通って行き，その時に作られた道はいまだに土地の人からタン・ジープン（日本人の道）と呼ばれているという。中腰になりかけた巡査は一段と声を落して，敗戦時の日本軍の悲惨きわまりない姿を再現する。かれは続けて，シッタン川の戦いに敗れた日本兵はカヤ川やカレン川を通って，メサリアン北方数10キロメートルのコン・ユアム地方に逃げ込んできたという。かれらの大部分はメ・ヨムの流れに沿って南下し，メサリアンを通ってチェンマイの方向に向かったようである。戦いに敗れた日本兵の大部分を悩ましたものはマラリアやアメーバー赤痢，それに加えて飢餓であった。メサリアン地方も食糧不足であったうえに，日本兵はすでに物を買う金もほとんど持っていなかったようである。このような物語りを聞いてはじめて，メサリアンの警察の前に現在でも野ざらしになっている日本製の重機関銃の歴史がおぼろげながら解ってくる。かれは立ちあがりながら“あなたとはそろそろお別れだから言っておこう。メサリアンでは数100人の日本兵が死んだですよ。”わたくしは聞く“何人位ですか”，“5～600人かな。”とにかく同氏の説明によると，ライ・コン（かなりの数）の日本兵の死体を埋めたのを見たというのである。“お墓はどこですか”，“墓などありませんよ”，“ではどこに埋めたのですか”，かれはその場所は飛行場の東側の林の中だと教えてくれる。一見平和そうに見えるこのメサリアンの谷に，歴史の爪跡がこんなになまなましく残っていることを知り，わたくしは襟をただす思いであった。タイ国の西北部のこんな辺地に，戦後20年余りもたったというのに，だれ1人おとずれる人もなく眠る数多くの同胞がいると知り，まったくやりきれない思いになる。

翌日わたくしは町に行き酒と線香を買い，スコールのあい間をぬって飛行場に行く。飛行場といっても赤土をならして平坦にした広場である。周囲はチーク林の2次林のようで，1～2メートルの灌木と雑草がびっしりとはえている。まったく人気もない。蛇やヒルに気をつけながら，灌木林にはいってみる。見わたしてもすでにそれらしいものはない。20年の歳月がすでに流れている。よほどの大発掘でもしない限りは遺骨の発見は不可能であろう。あたりの草や木は久しぶりの雨でうっそうとしている。どこかで蛙の押し殺したような声がする。その一隅にわたくしは線香をさし，火をつける。煙は湿った空気にたなびいて，木々の間を流れてゆく。家内はどこからか金魚草ににた野の花をつんできて，線香のそばに置く。そのあたりに酒をまくと，赤くにごった水たまりに流れこみながら，あたり一面にアルコールのあわい香りをまき散らす。しばしこうべをたれる。やがて，顔やうでにむらがってくるカやブヨを追いながら林から出ると，おりから雲間からさしこんでくる西日が目に痛かった。家内は“この場所の景色が良いのがわずかな救いね”とぽつんと言う。しかし，わたくしはそれに答えずにオートバイのエンジンをかける。次の調査でまたもどって来る時には，内地の香りのある物でも持参して手向けよう……と思いながらアクセルをふかす。